

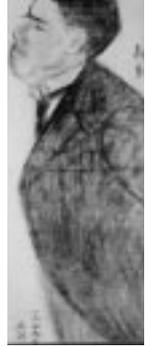
アルファ



[特集] 新世紀への展望

Nagoya Gakuin University
Library Communications

Vol.11, No.2

結婚式・シドニー(オーストラリア)
Ishikawa Terumi, 1996.

新世紀への展望

湯 浅 康 正

未来予測について考えるとき思い出すのは、大阪で万国博があった1970年ころ流行した未来学のことである。高速の交通機関、高層の建築物、宇宙への進出など楽天的な未来を描き出したこの言説は、その後、資源の枯渇、環境の破壊などの問題が現れ、科学と技術の進歩がそのままでは人々の福利に結びつかないことが改めて分かってくと、忘れられていった。

現代は変化が激しく、急速な時代だから、日々の変化に目を奪われがちだが、文学を勉強する者としてはむしろ、悠久に変化しない人間の内面、何百年もの長い時間をかけてゆるやかに変化する意識のありように目を凝らしていきたいと思っている。2001年から始まる新しい世紀で気になるのは、現在進行しているグローバル化の行方と仮想空間の未来である。

電子技術、情報技術の発達により、私たちの地球は今、ひとつのネットワークでおおわれ、大量のヒト、モノ、カネ、情報が国境を超えて往來するようになった。経済は一國の枠組みをとくに超えて、世界が一蓮托生の状態になっている。こういう事態の進行の中に、18世紀フランス革命に始まる国民国家の解体、終焉

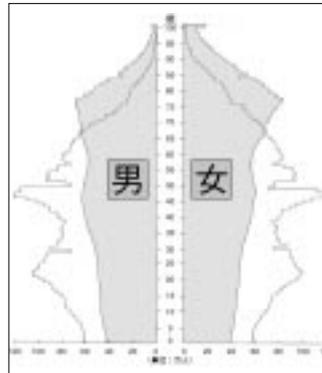
の前兆を見る歴史家は多い。また現に、ヨーロッパでは国家を超える共同体の構築が始まっている。これまでの国際社会では、人々のアイデンティティーが近代の政治的産物である国民国家に求められることが多かったが、これからはどうなるのだろうか。みんなが地球市民になるのか、近年頻発している民族紛争、宗教紛争が示しているように、より限定的な自分のルーツにこだわっていくのか。

地球を単一の空間として統合した技術は、新しいもうひとつの空間、仮想空間を生んだ。マスメディアの映像の世界、ゲームの世界をふくめコンピュータのサイバースペースは現実の空間から自立した別の空間である。この仮想の空間は日常の空間にできた異次元の穴凹として、ただ人間の空間を拡張するだけか。それともフランスの社会学者ジャン・ボードリヤールのいうように、日常の空間を浸食し、リアリティを変質させていくのだろうか。

新しい千年期の出発の立ち会いは、想像するだけで胸が躍る。ある詩人のことばを借りれば、「しなやかな鋼のような心」をもって未知の世紀を迎えたい。

特集 『新世紀への展望』

新世紀における 高齢化・少子化の展望



高齢化の進む人口構造
我が国の人口ピラミッド
□ は1996年
■ は2050年
(平成10年版厚生白書より)

野村益夫

私は、大学の経済学部専門教育科目のゼミナールで、ゼミ学生の卒業論文の作成に関わってきた。ゼミ学生は、経済に関するものから、自由に卒業論文のテーマを決めた。学生自身が興味を感じるものとしては、(1)経済の情報化(電子マネー等)、(2)経済の国際化(貿易摩擦等)、(3)環境問題(地球環境や廃棄物・リサイクル等)、(4)高齢化社会における年金・医療問題、等がある。環境問題や高齢化に関する問題は、学生自身が極めて身近に感じているものである。最近スクールバスに乗っているとき、学生達が年金の話をしていて、自分たち若い人は年金の保険料を払わされるだけで、自分たちは年金を受け取ることができないということを話していた。また、大学・短大では、少子化の影響が顕著に現れてきており、入学者の定員割れが発生している。高齢化は人口における高齢者の割合が増加することを意味し、少子化は人口における子供の割合が減少することを意味している。そこで、新世紀における高齢化・少子化について考えることにする。

高齢化・少子化の進展により、年金・医療制度で懸念されることについて考える。65歳以上の老年人口は、2025年には27.4%に達すると予想されている。2025年には、高齢者の人口が子供の人口より多いことになる。年金については、年金の保険料を支払う人口が減少して、年金給付を受け取る人口が増加することになる。今の制度を維持するためには、現役世代が支払う保険料を大幅に引き上げなければならない。あるいは、消費税を大幅に増税しなければならない。国民年金の保険料を負担しない人の割合が全体の1/3程度あり、国民年金の制度が空洞化している。それで、基礎年金については消費税を充当すれば良いという考え方が国政レベルで議論されている。医療に目を転ずれば、現在でも医療費に占める70歳以上の高齢者医療費が巨額になっており、将来には医療の保険料の負担が大きくなると予想されている。学生を含む若い世代や現役世代は、将来の高い社会保険料負担や消費税の増税を予想しており、新世紀に対して漠然とした不安感を感じている。

高齢化・少子化の社会において希望となることに

ついて考える。住宅や道路・空港等の社会資本に関してはかなりの蓄積が進んでいる。ここでは、住宅の取得について予想してみる。商業地や住宅地の地価は、戦後から1991年まで物価や賃金の上昇率以上に暴騰したが、1991年以降下がりに傾いている。1970年代の前半までは、人口が農村から都市に流入したことが地価高騰の原因になった。その後から1991年までは地価の上昇トレンドが続き、特に1980年代後半では地価にバブルが発生した。今現在高齢者の持ち家比率は高い。ところが、少子化の進展は、世帯の家族構成が変化しなければ、将来住宅を購入する世帯が減少することを意味する。将来住宅を購入する世代は、夫婦でそれぞれの両親から2つの住宅を相続する可能性さえある。新世紀において住宅の供給よりも住宅の需要が減少すると予想されるなら、土地が世帯年収と比較して購入し易くなる可能性が高い。土地を相続できない世帯も、現在と比較すると住宅購入の経済負担が軽くなるのではないかと思う。

新世紀の高齢化・少子化が進行する社会で、懸念されることと希望について考えてきた。国は、この問題の解決策として、高齢者の雇用の促進、女性労働比率の上昇等を通して対応するであろう。現在予想されている将来の高齢・少子社会は、日本の歴史で初めて経験することであり、その対策を歴史から学ぶことは困難である。しかし、急速に高齢化・少子化が進展することで日本で長年に渡って形成された制度・習慣が機能しなくなることになり、日本社会全体が変化の激しい世界になる。例えば、ここ数年における大学・短大の経験は、従来の予想を超えて大学・短大の変革を求めている。さらに、大学・短大は、企業と同様に、高齢化に対応しなければならない。現在の新卒者の就職状況は大変厳しい。変化の激しい社会では、若い世代はやり甲斐のある仕事に就ける可能性が高い。新世紀における高齢化・少子化の問題については、年金・医療や企業の退職金制度等における悪い点が強調されるが、この問題のプラス面に着目することも重要である。

21世紀日本の国際競争力



日本のCDの海賊版が、アジアでは数多く出回っている。
(写真は、日本のヒット曲海賊版CDジャケット)

小井川 広志

日本経済は、21世紀の将来にわたってますます繁栄していく。こう考える論者は、ほとんどいないのではないか。悲観的にならざるを得ない理由が、いくらでも指摘できるからだ。

日本の経済力を支えてきたのは、製造業における高い生産性であったと言われている。なるほど、日本は加工貿易で付加価値を付けることによって、今日の繁栄を築いてきた。しかし、産業空洞化や理工系科目の著しい学力低下、勤勉性の喪失、高齢化などによって、これまでのような競争力が維持できると考えることは現実的でない。製造業の拠点は、むしろ次第に周辺の国々にシフトしていくであろう。そうすると、国際競争力を持つ産業は、日本国内から次第に姿を消していくことになる。こう考えていくと、日本経済の将来について、我々は明るい展望を見出すことが難しい。

それでは、製造業の地盤沈下は日本経済の停滞と同義なのであろうか。必ずしもそうではない、というのがここの私の主張である。実のところ、日本経済の競争力は、非常に多面的なのである。その多面性は、海外、特にアジアで生活をした場合に痛感するに違いない。

日本人のサービスは、過剰と感じられるほど、繊細できめ細かい。ほとんどの日本人は、アジア諸国のレストランに行くと、その態度の悪さに不快となるらしい。散髪やクリーニングなどの対応にしても、技能が未熟な上に、態度もぞんざいで味気なさを実感するであろう。普段、我々がいかに濃厚なサービスに漬かっているかがわかる。これは、言うまでもなく、日本人の過剰な要求に日本のサービス産業が適応してきた結果に他ならない。日本のサービス財の品質は、需要に刺激されて十分に高い(高すぎる?コストも)のであり、国際競争力を発揮する潜在力が多分に残されているのである。

例として、アジアのミュージックシーンを考えてみよう。アジアでは、華僑が最大の音楽マーケットになっているが、そのマーケットは、驚くべきほど新陳代謝が悪い。一例を挙げれば、「四天王」と呼ばれている4人の男性歌手の人氣が圧倒的なのであるが、私の知る限り、彼らはもう十年以上も「四天王」として芸能界に君臨しているのだ。その間、彼らは、ほとんど代わりばえのしない歌を、消耗品のように単純に生産し続けている。彼ら自身の芸域が広がっ

てきたとも思えないし、また、彼らの存在を脅かすようなライバルも、不思議と登場しないのである。あれだけ食道楽の中国人が、片や音楽サービスについては著しく低い質で満足しているのは、私には不思議でならない。

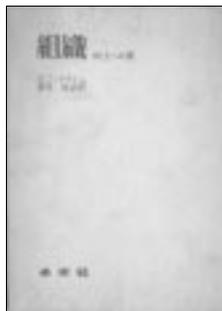
それだから、日本のアーティストがアジアで少しのプロモーションを行えば、その目新しさからか、香港や台湾の若者は釘付けにされるのである。なるほど、「四天王」たちの代表曲のいくつかは、実際にも、サザンや牧原敬之の曲のカヴァー・バージョンなのだ。日本のポップスが持つ競争力に、我々は十分な自信を持って良いのである。

同じ事は、年間数十本製作される日本のテレビドラマにも当てはまる。とにかく、アジアのテレビ番組は工夫やひねりが少なく、退屈で、観ていてすぐ飽きる。これは香港での話だが、テレビが退屈なので、VCD(ビデオCD)がよく売れるらしい。よく売れるとなると海賊版(コピー)が出回るのも香港らしいのだが、そこで面白いのが、出回る海賊版VCDの殆どが、ハリウッド映画が日本のテレビドラマなのだ(もちろん中国語の字幕付き)。「理想の結婚」や「星の金貨」は、一時期、香港で大ブームになっていた。売れないVCDを、わざわざ海賊版で作ったりはしない。地元のテレビ番組ではなく、日本のドラマがVCD屋の店頭に並んで売り切れる、ということは、そのドラマが市場で競争力を持っている、ということに他ならない。日本のテレビドラマの中には、其の、大変出来の良いものがあり、それは十分に国際競争力を持つのである。

結局、日本経済の競争力の源泉は、真面目さ、協調性、凝り性、そして(通説に反して)創造性豊かな点などにもとめられるのである。これらの諸要素が、これまで、たまたま製造業の局面において開花したに過ぎないのだ。したがって、その優位性が第三次産業でも存分に発揮されれば、日本経済のより一層の発展が期待できるかもしれない。

ただし、もしこの見方が正しいとすると、我々が講義で教える経済学の体系も、大きな修正を迫られることになる。経済学は、基本的にモノ作りを念頭にいてその体系が組み立てられているからだ。そう言えば、日本の大学教育サービスは、国際競争力をもっているのであろうか?時代の変化に応じて、教育者・研究者である我々自身の技術革新も求められているのである。

グローバリズムに思う



自身の経営共同体論の哲学的・社会的基礎づけの書といわれる、ニックリシュの名著『組織 向上への道』と、彼の経営学の集大成『経営経済』(原著復刻版)

中村義寿

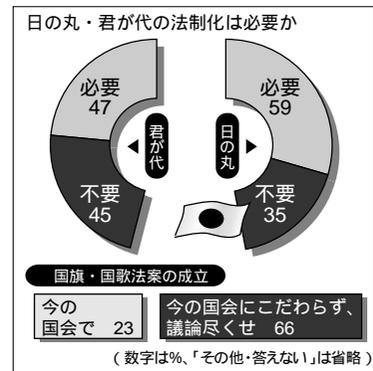
21世紀もいよいよ秒読みとなってきたが昨今、情報技術をはじめとする革新的技術の成果が豊かな新世紀を約束するとの明るい、楽観的な主張も多い。その一方でこのところ、日本経済の再生のために、そしてまたこれからの本格的国際化時代をにらんで市場競争原理に基づく経済のグローバル化の重要性を説く声が高まっている。ビジネスの自由や個人の能力の発揮を求め大企業やベンチャー企業の声がそこには大きく反映していると思われる。が、この市場至上主義の考え方は基本的に、資源も豊富で、個人主義的民主主義が根づく合理的な考え方の国・アメリカ発の思想であり、その歴史も文化も異なる我国にこれを無批判的に取り入れることは問題であるといわねばならない。資源がなく、欧米型の民主主義や合理主義とは違った道をとってきた我国にとって、この考え方は結局のところ、人間本位の社会ではなく、効率性や生産性優位の弱肉強食の無機質社会を志向したものとならざるをえないのではないか。「規制緩和」とともに、グローバル化による日本再生のキーワードともされる「自己責任」も心地よい響きを持った言葉ではあるが、これとて結局は一部の勝組の人たちの「言い訳」になってしまい、そうでない多くの人たちには日々厳しい環境の中で暮らすことを強いる、冷たい社会を生む恐れすらあるのである。また、グローバル市場での競争倫理も競争の公正と情報の透明性ということに集約され、このルールのもと、マネーゲーム的にもっぱら利潤追求に志向した「経済人」が生まれ、倫理的人間は必要なしということにもなりかねない。

要は、変えるべきは変え、残すべきは残すというバランスの問題であろう。確かに戦後の日本がさまざまな局面で制度疲労をおこしていることは事実である。また、これが長引く景気低迷の原因のひとつとなっていることも事実であろう。そして今日、人々はその抛り所や進むべき方向を見失ったまま自信を喪失し、この悲観的ムードがまた心理的に景気

回復に水をさす結果ともなっている。したがって、いわゆる日本の経営についても、時代の流れとともに変わるべきところは変わらねばならない。大企業を再生し、ベンチャー企業を立ち上げることも重要である。これらは日本経済の再建のための前提でもある。ただ、変革を急ぐあまり「角をためて牛を殺す」ようなことになってはならないということである。戦後築き上げてきた経済大国、その基礎となった日本の経営の長所までも、このグローバリズムの風潮のもとに捨て去ってしまってはならない。

この意味で、日本人独特の「和」の精神に基づくチームワーク、人間中心の共同体経営などを再確認することは重要である。そして、アメリカ型でもないヨーロッパ型でもない第三の道として、「人間の顔をした市場経済」づくりに志向するとともに、それを世界にアピールしていくことは21世紀国際社会の中での日本の使命・役割の一つといえるであろう。戦後、日本人は経済的豊かさに執着して、エコノミック・アニマルと海外から揶揄された時代もあった。しかし、日本の経営が本来、資本の論理、経済の論理ではなく人間の論理を優先させる考え方に基づいたものであったことを忘れてはならない。安い、良質の製品・サービスを提供するだけではなく、リストラを回避し、従業員の雇用や生活を保障することも企業の重要な使命であるという考え方が日本人の伝統的企業観の中にはあった。「企業は人なり」といわれるが、企業の発展が人間次第であることは今日の内外の経営学の諸文献をみても明らかである。この意味で、日本の経営は普遍的要素をもったものであり、まさに「グローバル・スタンダード」たりうるものである。技術はもとより経済そして企業は本来、それ自体決して目的たるの地位を占めるものではない。それらは人間的幸福のためのあくまで手段である。

21世紀の日本と中国のために 「日の丸・君が代」の法制化に寄せて



1999年6月30日「朝日新聞」朝刊
面接による全国世論調査結果

中 田 昭 一

国旗・国歌法が国会で可決・成立した。大した議論もなされずに国会で強行採決された事実を、本学の学生のどれだけが認識しているか危惧している。しかし、そもそも今なぜ「日の丸・君が代」の法制化をこれほど急がなければならなかったのだろうか。広島県の高校校長の自殺が直接の原因のようにいわれているが、我々はより大きな時流を見逃すわけにはいかない。すなわち、有名漫画家を含む「自由主義史観」研究会が、従軍慰安婦問題を教科書で取りあげるのは「自虐史観」であるとして教科書からの削除を求め、自らの国家に誇りを持ちうるような「新しい歴史教科書」をつくることを提唱しており、そして、彼らの主張は決して無視しえない影響力を持ちつつあることである。注目すべきは、若い世代に共感者が多いように思われる点だ。その原因は多々あるが、その一つとして、将来への不安からくるアイデンティティの喪失を指摘することができるかもしれない。将来を保証するはずであった「良い学校」、「良い企業」というこれまでのルートが幻想でしかなくなり、新たな帰属先として国家がクローズアップされているように思えてならない。このような見方の正否はともかくとして、日本人は自らの国家にことさらに誇りを持つべきなのだろうか。

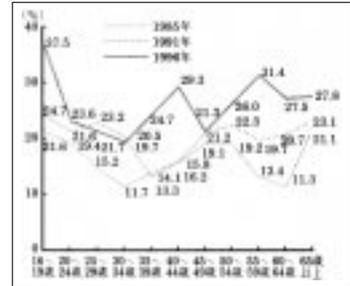
日本はアジアの一国であり、21世紀のアジアの繁栄が日本の未来を左右することは必定である。さらに、アジアの「大国」たる日本と中国がアジアの安定と発展に果たしうる役割は大きい。しかしながら、アジア経済危機の際、日中両国は何一つ共同で対処しなかった。日中が国際舞台でなかなか協力できないのは、周知のように両国間で歴史の和解ができていないことに原因がある。それは戦後のドイツとフランスが歩んできた道とまさに対照的である。それでは、なぜ日本と中国はドイツとフランスのように成れないのだろうか。それは日本と中国が負っている歴史問題が極めて重いということもあるが、それだけではあるまい。歴史の和解にはグラスルーツで

の和解に向けた動きがもっとも大切であり、民主主義ではない社会との和解は十分にはできない、という歴史家のアルフレッド・グロセル教授の言葉を引きつつ、朝日新聞編集委員の船橋洋一氏は、中国との和解の困難さを指摘している。〔船橋洋一「日本@世界」(『朝日新聞』1999年7月1日)〕。確かに言論の自由が十分に保証されているとはいえない中国と、草の根の和解は難しい。ただ、それだからこそ、曲がりなりにも自由で民主主義的な社会に生きている我々が日中の歴史問題について正確に理解し、かつ活発に発言することによって、一步一步和解への道を行んでいく他はないのである。

再び、日本人は自らの国家に誇りを持つべきなのだろうか。ナショナリズムは時代・地域・具体的な状況の相違によって、その意味内容や性格も大きく異なる。ある場合には非常に民主主義的・連帯主義的なものであるが、他方ではきわめて排外主義的・侵略主義的になりうる。その意味では大きな危険性を持ったイデオロギー・運動である。日本の場合、不幸にもファシズムと結びつき、民主政治の芽が摘みとられただけではなく、アジア諸国に甚大な被害をもたらした過去がある。国旗・国歌問題に対して日本人は日本人自身のために、またアジア諸国のためにもっとデリケートでなければならない。日本の民主主義はまだまだ脆弱であるし、民主的な社会を維持して日本の負の歴史を克服する義務を、我々(特に若い世代)はアジア諸国に負っているのだから、国家に対する誇りなど危険でありこそすれ、何のメリットもないのである。ましてやヨーロッパ連合のような国民国家を相対化する壮大な実験が進行しつつある現在になって、「日の丸・君が代」を拙速に法制化しようとするのは、やや時代錯誤であろう。見通しのない不安な時代であればこそ、国家にアイデンティティを安易に求めることなく、冷徹な頭脳で判断し、行動するよう心がけてほしいと思う。

[権利に関する考え方]

たとえ他人に迷惑をかけるようなことがあっても
権利は権利として主張していきたい



平成10年版青少年白書より

21世紀と「生きる力」

北川 保

新聞に「夢をはぐくむ社会目指せ」(5/16産経)と出ている。日本青少年研究所が日米中韓の高中生に実施した「21世紀の夢に関する調査」によると、日本の生徒は未来に無関心という。他方「『人間開発指標』で日本4位」(7/13毎日)とも出ている。国連開発計画の99年版「人間開発報告」によると、所得水準と平均寿命、教育水準を総合した「人間開発指数」で、日本は前年の8位から4位に上昇したという。各国で若者に出会う時、2紙の記事はともに事実であると思う。

私は中学・高校で社会科(公民科)を担当している。小中高校の社会科の目標は、「善き公民・市民を育てること」で一貫化している。戦後、日本の教育は「国家のための教育」から「個人のための教育」に転換した。公民教育は「善い市民」を個人的な関心を満足させるのに必要な限りにおいて政治に参加する市民と捉える自由主義的な見方を探ってきた。しかし今、「善い市民」を公的な熟慮・決定・行動の過程において十分に論争し、相互に納得する市民と捉える共和主義的な見方を蔑ろにしてきた、という反省がなされている。

「生きる力」が21世紀に向けての教育のキーワードである。新聞の論壇に有馬朗人文相は「『生きる力』をはぐくむ教育」(6/11朝日)を説き、『東京理科大学』巻頭言に西川哲治学長は「自画像を描き、生きる力を」を書いている。「生きる力」は初中等教育のみでなく、高等教育の課題でもある。「生きる力」とは、子どもたちが自分で課題を見つけ、自ら学び考える資質や能力、自らを律しつつ他人と協調し、他人を思いやる心や感動する心、たくましく生きるための健康や体力などをいう。小中高校における「総合的な学習の時間」の新設、私自身のディベート(討論)やNIE(教育に新聞を)の授業はそのためである。

若者に多くの光も見る。昨年、一昨年と勤務校のチームは、全国高校生ディベート大会で準優勝した。昨年の論題は「日本は積極的安楽死を法的に認めるべきである。是か非か」であった。安楽死は極めて価値命題的である。けれども、ジャンケンで肯定側

か否定側かを決めるのは相対主義である。生徒たちはディベートがなぜ成り立つのかを学び、安楽死を通して個と社会との関連に目を向ける。また、日経新聞は論文「21世紀と日本」の受賞者を発表した(7/11日経)。大学・大学院生部門最優秀賞を受賞した深瀬晋太郎さんは「グローバル時代の日本社会」と題して、「地球市民社会の実現」を主張する。もともと市民という言葉は、フランス革命のころのcitoyenという語から出てきたもので、英語の辞書には「citizen = 国への義務を果たすことと引き換えに、国から保護してもらう権利を手にした人間」とある。かつてある弁護士は「なにびとも見る権利あり秋の月」という迷句を詠んだが、見るのは権利ではなくたんなる自由である。自由や権利は憲法に保障されて初めて基本的人権となる。

「大学全入時代 今春で実感?」(7/4日経)や「専門大学院を来春創設 文部省方針『即戦力』の人材育成」(8/24朝日)と新聞は報じ、日本は学歴社会から学習社会に移り、大学は「生きる力」を涵養すべく実学志向へとシフトしている。本来大学院に学ぶ私たちも時代の子である。ただ「一般教養科目は、現代世界でいかなる問題が挑戦されるべきかを捕らえるのにまことに枢要である」(佐々木力著『学問論』)ことも真実である。

A.H.マズローは『人間性の心理学 モチベーションとパーソナリティ』の第4章「人間の動機づけに関する理論」で、欲求5段階説を出している。生理的欲求に始まり5段階目は自己実現である。「人は自分に適していることをしていないかぎり、すぐに新しい不満が生じ落ちつかなくなってくる。(略)人は自分になりうるものにならなければならない。(略)このような欲求を自己実現の欲求と呼ぶことができるであろう」と記す。またダニエル=ゴールマンは『EQこころの知能指数』で、いかに知識の量が多かろうと、心と人間性を欠く人は社会人としても家庭人としても不適格である、と豊富な事例を挙げて主張する。

人は社会的存在であり、求めるべきは「社会で生きる力」と「自分に生きる力」とである。

グーテンベルク聖書印刷の意味



Gutenberg

ヨハネス・グーテンベルク (Johannes Gutenberg, 1398頃 - 1468) はドイツの発明家で印刷業者。ヨーロッパにおける活版印刷の発明者で、“42行聖書” (通称“グーテンベルク聖書”または“マザラン聖書”) の印刷者として知られる。((株)ほるぶ出版発行『世界伝記大辞典』より)

葛井 義 憲

グーテンベルク (Johannes Gutenberg) の印刷術の発明は「中世のとばり」を開けた。彼が印刷機を考案し、故郷マインツ (Mainz) で、『グーテンベルク聖書』を刊行したのが1455年頃であった。42行で印刷されたゴシック書体文字の聖書である。その他に36行聖書 (1457年頃) も発行された。

今回、本図書館が購入した復刻版はスペイン、ブルゴス (Burgos) のブルゴス州立図書館所蔵の『グーテンベルク聖書 (Biblia Latina)』である。「聖書」2巻「注釈書」1巻で構成され、ミュンスター (Münster) で、1995年に刊行された。この復刻版の原本は、フスト (Johann Fust) の経済援助によって、一番最初に印刷された160 ~ 180部 (1445年頃) の一つである。現在、この最初の原本は48部を残すにすぎないと言われている。そしてそのうちでも、この『ブルゴスのグーテンベルク聖書』は大変美しい装丁の一つとされている。

名古屋学院大学図書館に「近代の一条の光」である印刷術によって刷られた『聖書 (復刻版)』が置かれた。刊行された1445年頃は「自然と人間との発見」と言われたルネサンスのうちにある。「自己と他者」「自然と人間」との距離・差異を意識し、「人間中心の近代」へと転換する処に位置する。「神中心の中世」を代表する「聖書」と、近代の「象徴」の一つである「印刷術」と結び合った。そしてこの結合は、ヨーロッパ各地に「思わぬ現象」を生み出していった。印刷された「口語訳聖書 < 母国語訳聖書 >」が各地で盛んに求められるようになったのである。手で写した「聖書」でなく、鮮明な美しい文字が現われ、数量が年々増加していく印刷された「聖書」は人気を博した。このように、グーテンベルクの印刷術の発明は「聖書」を「教会」(ローマ・カトリック教会)の外にある信仰者のもとに届けさせた。家庭で、友人たちと一緒に、母国語で印刷された「聖書」を手にとり、自分の目で一つひとつの言葉をじっくりとおいつつ、読めるようにさせた。自分の頭脳で理解することを可能とさせた。「聖書」を前に、祈りの時もう意した。

かかる営みは「神中心の中世」を脱出した「近代

人」を捉えるものであった。「自己と他者の相違」を知らされ、「自らと外界との間に明瞭な境界」のあることを認識させられた「近代人」は、やせほそった自己を識り、育み、この孤独な自己を基盤にして生きるしかなかった。信頼できるのはこの自己だけ。そしてだれもが自分の目、手、耳、口で確認し合い、自分の頭脳で理解できるものだけであった。すなわち、客観性、普遍妥当性、合理性を備えたものだけであった。この「近代人」の精神態度に、あの鮮やかに文字が印刷され、自由に手に取って、その内容を読み、識り、考えられる「口語訳聖書」は適した。さらに、「自らと他の識別」に骨を折り、「自己」以外のものを疑いに、疑い、あらゆるものが信頼できない彼らの心をも捉えた。彼らの不信と疑いは心に痛みと不安を与える。攻撃性と緊張を生み出す。孤独を痛切に知らせる。

かかる状況下で、このやせほそった自己は戦えるのか。「教会」も信用できない。「聖職者」も信頼できない。さらに、この自己さえ本当に信頼できるのか。この「世界の中心」であり、あらゆるものを識別する「基準」である自分は本当に、本当に信用できるのか。しかし、これを確かなものとしなければ、厳しい近代を歩むことができない。そんな苦悩の叫びが聞こえてくる。しかし、彼らの不安と痛みに応えるものが、印刷された「口語訳聖書」にはあった。「聖書」を通して知る神の愛と救い、この神に赦され、導かれ、祈りつつ、近代の荒野を戦い、歩むことができる。

グーテンベルクの印刷術の発明がプロテスタント諸教会を生み出す大きな力の一つとなった。ヨーロッパの近代精神を形成させる有力な力の一つとなった。そんな近代の幕開けに寄与したものの一つ、『グーテンベルク聖書』が本学にある。

最後に、近代が軽視してきた「相互の信頼・共感」「他の生命(自然)との共生」「豊かな感性・想像力の育み」は今こそ必要だと思われるが、いかがなものだろうか。

Information



開架図書室

- 1 新世紀への展望
- 2 新世紀における高齢化・少子化の展望
- 3 21世紀日本の国際競争力
- 4 グローバリズムに思う
- 5 21世紀の日本と中国のために
- 6 21世紀と「生きる力」
- 7 グーテンベルク聖書印刷の意味
- 8 Information
編集後記

卒論作成のための文献調査ガイダンス

卒論の準備を始めた人を対象にゼミ単位で開催します。論文の基本的な書き方、必要な資料（図書・雑誌論文・新聞記事・統計資料など）の探し方や入手方法、文献目録類の使い方、OPACやCD-ROM端末の操作方法について説明します。スタートする前に知っておくと役に立つ情報がたくさんあります。ぜひお申し込みください。

開催期間：10月～12月（後期授業期間中）

場 所：グループ研究室（図書館3F）

申込方法：授業時間内で行いますのでゼミ単位での申し込みとなります。

先生方には、別途ご案内をさしあげています。

試験前の開館延長を行います

定期試験前2週間は開館時間を延長します。レポート作成や勉強に、ぜひ利用してください。

期 間：1999年12月20日(月)～12月24日(金)
2000年1月11日(火)～1月14日(金)

開館時間：9:15～18:00 資料相談・オンライン検索は17:00まで
*期間については変更になる場合があります。

冬期休暇中、長期貸出をします

冬期休暇中に図書を利用できるよう長期貸出期間をもうけています。

貸出期間：12月10日(金)～1月17日(月)

貸出冊数：10冊(学部生)

書庫を増設しました

このたび図書館1階を改装し、新書庫が完成いたしました。この書庫には年報、洋雑誌のバックナンバーおよび大型本（美術書・地図）が架装されています。

収容冊数は約11万冊です。

編集後記

今回のテーマは「新世紀への展望」と決まり、特集欄には各学部の諸先生より玉稿をいただいた。

また、今回より「資料紹介のページ」を新設した。このページは図書館に資料の購入を希望され購入が決定した資料について、購入申込みの先生より資料の紹介をしていただくという企画であり、今後このページ1枚を使って順次資料紹介を行っていく予定である。これにより、従来評論誌の色彩の濃かった本誌も図書館報らしさを出していくことができるものと考えている。

さて、新世紀を展望する時、当然にして期待と不安が交錯するものとなる。しかし、この度の新世紀という時、この20世紀という100年の終幕と同時に1001年より2000年への1000年の終幕と開始という意味を持っている。

あらたな1000年のスタートを切る2001年1月1日まで2年を切り、新世紀は間もなくやって来る。

新世紀はいかなる時代になるのであろうか。

われわれとしては希望と繁栄の時代になることを願っている。

日本の20世紀後半の最後の十年はバブル経済の破綻以降、停滞と悲観の十年であったから、来るべき世紀こそは繁栄の世紀であってほしいと思うのは誰も同じであろう。本来ならば21世紀は「日本の世紀」になるのであり、それは未来学者ハーマン・カーンも予測していたことであった。どこで道に迷ったのであろうか。このままの日本の延長線上には「日本の世紀」はなく、日本は衰退をするばかりであろう。

日本は現状の「創造的破壊」を行い、新しい飛躍に向けた助走を開始していく必要がある。

日本は悲観論を越えて「建設的楽観論」に立ち、日本再構築に向けた現状分析をおこない改革の道筋を立てていかねばならず、それはこの2年あまりの内に実行しなければならない。日本には時間との競争、スピードが求められているのである。この改革をなし遂げてこそ21世紀を希望を持って迎えることが出来ることであろう。

(倉)